

北海道F₁ トウモロコシの新品種紹介

—ワセミノリ(N 75日 : SH 250)・N 85日(SH10)・
N 95日(SH145)について—

雪印種苗(株)
中央研究農場

橋爪 健



高品質・高栄養の自給粗飼料確保と早生化の進展に伴い、最近におけるF₁ トウモロコシの作付面積の伸びは著しく、昭和55年には5万4,800 haに達しています。このうちの半分以上は十勝・北見・網走地域に集中し、また、別海・天北等のいわゆる限界地域におけるその伸びは、年々倍増しています。当社では、かねてより早生系優良品種の選定に力を注いでおりましたが、昨春より従来の系統を変更し、さらに優れたワセミノリ(N 75日 : SH 250), N 85日(SH 10)を、また今春よりN 95日(SH 145)を発売致しました。これらの品種は多くの方々のご協力をいただき、昭和51年よりF₁ トウモロコシ普及会・モデル栽培農家・現地試験に供試され、優秀と認められた系統です。以下にこれらの成績をまとめて、ご紹介したいと思います。

ワセミノリは従来のJx22に比べ、初期生育・耐倒伏性・子実収量がとくに優れた早熟性のフイント・デント種です。F₁ トウモロコシ普及会における過去3カ年の成績を図1に示しました。この75日クラスの奨励品種はワセホマレですが、このTDN収量を100とした場合、3カ年・7場所平均でワセミノリは103と多収傾向を示しています。とくに、天北(102)・根釧農試(105)・興部町(118)・豊富町(112)において多収を示し、登熟も55年が冷害年であったにもかかわらず、糊熟後期〜黄熟期に達しています。

耐倒伏性については平均で5%前後とワセホマレと大差なく、興部町ではむしろワセホマレより強いことが示されています。倒伏については、稈の強さ、気象条件等諸々の要因があり、ここではいわゆるナビキ倒伏と折損を含めて述べていますので、この程度では機械収穫には支障ないと思われます。

播種して最初に気がつく事は発芽・初期生育の良否でしょう。根釧農試では初期生育の良否を示すために、個体当たりの乾物重を調査していますが、その結果を表1に示しました。初期生育については道内在来種の血を保有するワセホマレが最も良好であり、ワセミノリは現在市販されている輸入品種の中では最も優

ワセミノリ (N 75 : SH 250)

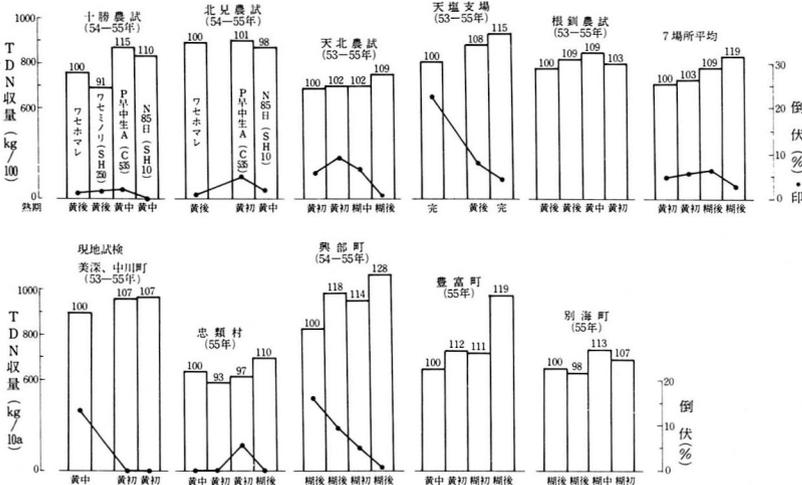


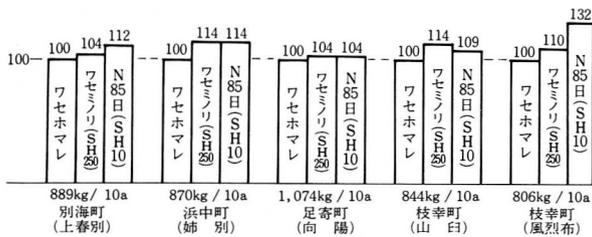
図1 F₁ トウモロコシ普及会試験委託試験成績 ワセミノリ (SH250), N 85日 (SH10)

表1 初期生育の比較

(根釧農試)

品 種	53 年		54 年		55 年		平 均
	DM重	順位	DM重	順位	DM重	順位	
ワセホマレ	1,760	1	444	1	285	1	830
ワセミノリ	1,350	3	335	4	209	7	631
P早中生A (C 535)	1,250	6	350	2	194	10	598
市販種 A	1,070	18	299	6	165	13	511
市販種 B	1,020	9	219	8	213	6	484
供試品種数 (計)	—	12	—	8	—	14	—

個体当たり (乾物量 (mg)) で示す



※：ワセホマレ TDN 収量 ※

風乾 TDN 収量 ワセホマレ (100%) 対比普及所調査

図2 モデル栽培現地試験成績 (53・54年の平均値)

レ対比: 76%と、P早中生A (C 535)より若干優れた値を示しています。最近、初期生育だけはとくに良好な大粒フリント種をよく見かけますが、これらの品種は一様に、耐病性・耐倒伏性が劣りますのでご注意ください。

次に53,54年のモデル栽培現地試験の結果を図2に示しました。図から明らかなように、とくに浜中町・枝幸町ではワセホマレに比べ10%以上多収であり、現地でもまた喜ばれております。

このようにワセミノリは

- 発芽・初期生育の良好な極早生種
 - 耐倒伏性・子実収量の優れた早熟性品種
- です。

先日、モデル栽培の検討会に出席致しましたが、限界地域ではまだ8,000本/10a近くで密植栽培されていると伺いました。このような極早生種を限界地域で栽培するための最も大切な事は、倒伏を防ぎ、登熟を進め、栄養収量を確保する事です。粗植の方が登熟も進み、実入りも良く、また子実収量も高くなりますので、5,000~6,000本/10aをお勧め致します。基本を忠実に守る事が成功への秘訣です。

最近、老朽化草地の更新が問題になっていますが、条件の良い十勝・網走・上川地域では、1番草収穫後にこのワセミノリを播種し、生収で5ton/10a程度は収穫できます。この場合、

- ①播種は6月15日までには終了する。
- ②積算温度で2,100~2,200℃前後は確保し、晩期収穫に努める。
- ③牧草根の分解促進剤として、チッ素を3kg/10a耕起前に全面散布する。
- ④虫害防除のためダイアジノン・ビニフェート

を3~5kg/10a施用する。

等がポイントとなります。美瑛町・管野勝美氏では、TDN収量で805kg/10a (53年・黄熟後期)の成績が得られております。

最後に、ここ2・3年、小麦、ビート等の換金作物の作付が急増していますが、条件の良い十勝・網走・上川地域では、このワセミノリの跡に小麦を作付してはいかがでしょうか。F₁トウモロコシの利点の一つとして、ヒエ・メヒシバ等の駆除の難しい雑草を除草剤で駆除できる事があります。図3のように、老朽化草地を更新する際、極早生のF₁トウモロコシを作付し、跡作に小麦を、さらに緑肥としてアカクロバ等を導入すれば、土壤の肥沃化にもつながります。条件さえよければ、これらの地域では、ワセミノリを糊熟後期~黄熟期で収穫し、小麦の作付が可能です。その際、大切な事は前年秋のうちに秋耕して、F₁トウモロコシを早播きし、コムギはゼロ Tillage等の不耕起播種を導入する事が有望と思われま



図3 F₁トウモロコシ→小麦への作付体系

N 85日 (SH 10)

SH 10はそろい性の良好なシングルクロスプリント・デント種です。従来、この85日クラスの準奨励品種としてP早中生A (C 535)がりましたが、最近この品種も古くなり、倒伏、そろい性の悪化がめだち始め、Lizaが新しく準奨励品種候補となりました。図1に示しましたように、SH 10

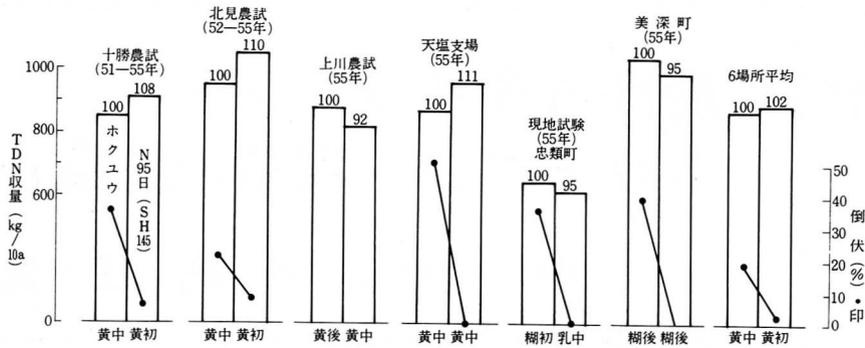


図4 F₁ トウモロコシ普及会委託試験成績 N 95日 (SH 145)

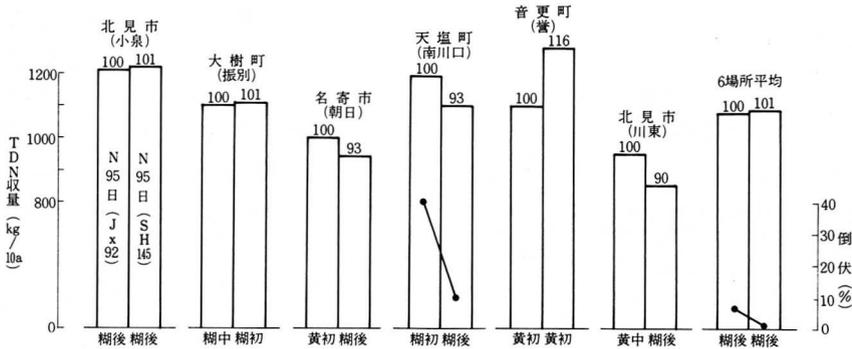


図5 モデル栽培現地試験成績 N 95日 (SH 145)

はTDN 収量では、3カ年・7場所の平均で、ワセホマレ対比119%、P早中性Aより10%も多収を示しています。とくに、天北農試(109)・天塩支場(115)・興部町(128)・豊富町(149)等条件の良い天北・北見地域で多収を示しています。モデル栽培でも同様な傾向が認められ、ワセホマレに比べ、10%以上の多収を得る事ができます。

耐倒伏性については、これら極早生品種群の中では最も強く、根釧農試(19%)を除き、ほとんど倒伏は認められず、ワセホマレとの間には有意差が認められます。さらに、従来の品種とは異なり、枯上りが少なく、茎葉収量も豊富なサイレージ用品種のため、収穫適期幅の拡大も望めます。

最後に、道央・道南地域では一番草収穫後の栽培にも適しており、6月中旬播種で、八雲町・細川和彦氏ではTDN 収量で946 kg/10 a (53・54年平均, 黄熟中期), また千歳市・佐竹公男氏では977 kg/10 a (53年・黄熟中期)の成績が得られています。

このように、N 85日 (SH 10)は耐倒伏性がとくに優れたサイレージ用多収品種であり、条件の良い天北・上川北部の山麓地帯・十勝・網走・北

見地域の倒伏多発地帯に適しています。

N 95日 (SH 145)

SH 145は、昭和52・53年、倒伏が多発した十勝農試において、最も倒伏が少ない事により注目された、カナダの奨励品種です。この95日クラスの奨励品種としてホクユウがありますが、SH 145はホクユウよりは若干晩生であり、N 95日 (Jx 92)とほぼ同熟期がやや早生の品種です。十勝(51~55年)・北見農試(52~55年)における成績では、ホクユウに比べ、約10%増のTDN 収量が得られています(図4)。耐病性については特殊な遺伝子を保有しているために、ススモン病には強く、ゴマ葉枯病にもやや強い良好な成績を示しています。

従来のN 95日 (Jx 92)に比べてみますと、収量的にはほとんど大差ありませんが(図5)、早熟なために若干枯上りが認められます。耐倒伏性がとくに要求される十勝の山麓地帯には好適な品種と考えられます。最後に、今年もこれら優良品種を組み合わせてF₁ トウモロコシ栽培の基本を忠実に守り、品種の能力を100%発揮させ、秋の収穫を皆様と共に期待致したいと思います。